

めだかの歌

後藤檜根 著

めだかの歌

後藤檜根 著



＜著者略歴＞

- * 大分県挾間町出身。明治41年生まれ。
- * 小学校教員，毎日新聞社員等を経て，昭和18年作家生活にはいる。
- * 著書に「月夜の棉畑」(童謡集)，「黒潮の子」(長編児童小説)，「千里眼物語」(児童小説集)，「春を待つどんぐり」(童話集)他。
- * 戦後児童文化の向上に貢献ありとして，第1回モービル児童文化賞，第2回吉川英治賞受賞。
- * 現在，日本童話会会長，日本児童文化団体連合委員長，立正女子大学講師。
- * 現住所＝東京都足立区上沼田町1062

め だ か の 歌

定価 380 円

昭和44年4月10日初版印刷

昭和44年4月15日初版発行

著 者 後 藤 櫓 根

発行者 和 田 吉 次

印刷所 東銀座出版印刷

発行所 株式会社 學 園 書 房

東京都文京区本郷7の2の4 郵便番号113

Tel. 東京(813)0477(代) 振替東京11141番

©1969＜検印省略＞

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ま え が き

わたくしは、川が好きです。川の岸に立たずむのが好きです。岸に沿って、上流へ歩いたり、流れに沿って川下へくだったりして、川の流れを思うのは、たいへん楽しく、心なごむものです。

橋を渡る人や車。その影が川の流れに映ります。わたくしは、川岸から、しばらく橋の上の人や車のゆききを眺めます。

いろんな人が、いろんな生きかたのために、橋を渡っていることを考えます。そして、わたくしも、その中のひとりであることを考え、じっと川に映る自分の影を見ます。

あるときは、わびしい姿の影、あるときは何かのことにうきうきしている姿の影。

わたくしのよく行く川は、海に近いので、潮があげてきます。上げ潮になると、川は、きたないごみを浮かべて逆流します。

こんな汚物が流れてこなければ、川はどんなにきれいだろうかと思いますが、その汚物の一つ一つにも、だれかの生活がしみこんでいるのだと思うと、また、別な心もわいてきます。

ごみは、流心よりも岸の方が多く、そのごみのかげに、めだかの姿を見ることがあります。ごみの中にはえさが多いのでしょうか。そうなのか、めだかよ、と、わたくしは声をかけます。

下げ潮になると、きたないごみは、ぐんぐんおし流され、こんどは上流からきれいな水が流れてきます。ときには、野の花が流れてきます。だれがつんだ花でしょうか。

野の花かげに、めだかがいることもあります。それを見ると、また、べつなめだかの心を考えます。そして、花のかげのめだかよ、と、わたくしは声をかけます。

川のごみや花は、上げ潮に乗って上流へ逆流し、つぎには下げ潮に乗っておし流され、それをくり返しながら、川下へ、海へと流れていきます。しかし、そのかげのめだかは、静かに生きています。ごみの下で、花のかげで。

めだかよ、かわいいめだかよ。小さくとも、おまえの心のままに、生きつづけよ。

川にも潮はあげてくる。ごみや花を浮かべ、めだかを育て、川にも潮はあげてくる。

昭和四十四年早春

後藤 檣根

△
目

次
▽

まえがき

△漫画と童話▽

母	11
漫画と童話	14
子どもの夢	17
怒るな	20
認められる	23
ありがとう	26
特別待遇	29
童謡	32
人間不信	35
○×教育	38
幼心	41
神話	44
憂世風呂	47

名作……………	50
当世子ども気質……………	53
鍛練か競技か……………	56
政治教育……………	59
子どもの日……………	62
全人教育……………	65
日本の母……………	68
文学の教育的価値……………	71
「お話」は文学教育の尖兵……………	74
子ども向き戦争文学について……………	77
「子ども家」今昔……………	80
こんな子たちもいる……………	83
読書指導は幼児期から……………	86
△ふたりの父▽	
ふたりの父……………	91

名	94
女ですもの	97
悌ちゃん	100
アッちゃん	103
子どもに戻る	106
学校今昔	109
突きと押し	112
親方ごめんよ	115
白墨のにおい	118
先生と言われるほど馬鹿ではない	121
先祖さま	124
魚心童心	127
魚心一体	130
かまう	133
潮どき	136
自然の妙理	139

梅の実……………	142
柿のたね……………	145
ふしぎな話……………	148

△黄金馬糞学▽

蜘蛛の子の思い思いに散る軒端……………	153
ことば……………	156
無礼……………	159
若者の現代語……………	162
ことばが人間をつくる……………	165
兄弟垣にせめぐ……………	168
合宿共同生活……………	171
翻案・再話の問題……………	174
3ト……………	177
お稽古……………	180
遺産醜続……………	183

黄金馬糞学……………	186
ゴルフ場……………	189
爆弾池……………	192
イエスとノー……………	195
作家志望……………	198
明治百年より昭和百年……………	201
ふたりの青年……………	204
カッコいいということ……………	207
どこも同じいばらの道……………	210
蛙の手紙……………	213
道楽……………	216
モデルと作品……………	219
めだかの旅……………	222

*文章に添えた版画作品は、全国各地から寄せられたもので、この拙文を飾ることができました。ご好意に対して深く感謝します。

△著者▽

漫画と童話



母

わたくしの屋敷のどこかに、野良ネコが一匹住みついている。雌ネコである。その野良ネコも自然の条理に従って、春秋二回、子を産む。

『ネコなで声』といわれるほどネコは、子を愛する。

乳離れするまでには、何回も、その居場所を変える。それは、わが子を敵から守るためでもあろうが、よく観察していると、それだけではないらしい。子ネコの目が見えるころになると、隅っここの暗い産所から、少し外界の見える所に運び、歩き出すと、転げ落ちないような安全な場所に移す。さらに、子ネコの運動が活発になると、地面近くのところに移して、えさを捕える訓練を始める。まさに「三遷の教え」を上回る教育ママぶりである。

ところが、そのあとに感心する。子ネコが独り立ちできるころになると、母ネコの態度は一変するのである。それまでは『ネコなで声』で子ネコを呼び、お尻までなめて『ネコかわいいがり』していた母ネコは、子ネコが近づいてくると、火をふいて寄せつけない。

「もう、おまえは独り立ちできるんだ。甘えるんじゃない。」

と、きびしく叱りつけ、独立心を植えつけるのである。

飼いネコの場合とは、いささか違うであろう。

だれも、えさをくれる人はいない。野生のままに生きなければならぬ野良ネコである。

親ネコは、身をもって体得した生活のきびしさを、子に教えるのである。

さて、この野良ネコの教育ママを見るたびに、わたくしは、人間の教育ママのことを考える。子を愛することにおいては、ネコも人間も同じである。しかし、人間ママさんは、ネコほど、子の先々のことを考えて、愛のムチを振るうことがあるだろうか。

先日、テレビで、大学入試につき添っている母親と子のインタビューがあった。

「どうして、つき添ってくるんですか。」
「小さいころから、どこへ行くのもいっしょだったものざあますから、やっぱり気にな
りまして……。」



香川・仲南東小6年・馬場希志子

「きみは、どう思う。」

「うん、やっぱりついてきてくれないと、心細くて……。ううん、恥ずかしいなんて思いませんよ。」

こんな調子である。だから、子どもは一人前になっても、なかなか独り立ちはできない。

親に頼り、上役に頼る。何か大きな圧力を受けるとペシャンと参り、強力な誘いには、一も二もなく追随していく。そして、自我を失った若者は無軌道な行動に走る。

母は子が結婚しても『気になる』ものだから姑根性を發揮して、嫁から『ババ抜き』を、しいられる。

母の愛は強い。そして深い。だから、わたくしたちは、苦しい時、悲しい時にはいつも、慈愛に満ちた、優しい母を思い浮かべて『おかあさん』と呼ぶ。しかし、その母には、きびしい母の目が光っているのだ。

漫画と童話

わたくしは、ときどき、PTAなどの集まりに招かれて、おかあさん方と、子どもの読書指導についての話し合いをする。

そんなとき、いつも問題になるのは漫画とテレビのことである。

「漫画ばかり読んで、本を読まない。」

「テレビにばかりかじりついて、本を読まないが、どうしたら本を読むようになるか。」

この二つが話題になる。わたくしは、漫画やテレビが悪いとは思わない。あるものについては、これはどうかと思われるものもあるが『臭い物にはふた』をするよりもよろう。子どもだって、ちゃんと批判の目を持って読んでいる、見ていると思い直すのである。

しかし、本を読んでもらいたいと思う。

童話や小説は、漫画やテレビとは次元の違うものだから、同一に比較はできない。だから、漫画やテレビのほかに、童話も読んでもらいたいのである。